

時代を読み解く

シリーズ 44

補給や支援拠点として柔軟展開

1904年に勃発した日露戦争における日本海軍の戦略意義は、大陸に展開す

陸軍の兵站線確保にあつた。これを達成するための海上作戦の継続が、日露戦争における日本海軍ロジスティクスの目的であったと見えよう。

日露戦争において、艦隊の近傍にあつて海上作戦の継続を支えた存在が「前進根拠地」である。

前進根拠地は戦域に近接した戦略的な補給・支援拠点が定められた。

この前進根拠地でのロジスティクス支援能力を支えたのが、商船を改装した「特設艦船群」である。給炭船、給水船、給糧船、給兵船などがそれぞれの任務に応じ配置され、艦隊への迅速

1904年3月には「前進根拠地軍需品配給通信送達規定」が發布され、補給や通信の体制が制度化。仮根拠地防備隊港務部長が実務を統括することで、現地

また、佐世保鎮守府経理部は、補給の中核として各地の根拠地機能を最適化し、大連占領後には現地パ

後方支援施設ではなく、戦略的なハブとして機能し、日本の海軍勝利を陰で支える重要な要素となったのである。

前進根拠地の戦略的重要性

日露戦争における日本海軍のロジスティクス

点として機能し、単なる物資補給地以上の役割を果たした。

多様な機能持ち 作戦継続支える

かつ継続的な支援を可能にした。

これにより、前進根拠地の機能は特設艦船の活動へと移行した。これは前進根拠地が単なる臨時施設ではなく、制度的に海軍の作戦計画に組み込まれたことを示す。

ハブとして機能 長期作戦で優勢

総じて、日露戦争においてさまざまな点で当時との相違点が多いものの、戦域近傍での拠点の確保は現在においても非常に重要だと

今月の講師

石原 明德 2 海佐

防衛研究所 戦史研究センター 国際紛争史研究室所員



1971(昭和46)年生まれ、千葉県出身。立命館大学文学部卒業、93年海自入隊(一般幹部候補生44期)。経理・補給幹部。指揮幕僚課程修了、放送大学大学院修士課程修了、修士(学術)。第3術科学校教官、海自幹部学校教官などを経て、2022年から現職。今年4月から海幕総務課海自75年史編さん室兼務。専門は防衛装備移転史、軍事ロジスティクスの背景について(『戦史研究年報』第27号、24年3月)、「ACSAの変遷―日米2国間から多国間へ―」(『海軍戦略研究』第7巻2号、18年1月)などがある。

日露戦争での日本海軍の進根拠地が整備され、日本の対馬や台湾の馬公の既存うして前進根拠地は「戦域

裏長山列島、遼東半島の旅順などにも順次展開。最終的には占領地に9カ所の前

備・衛生・緊急対応機能も備えられた。特設運送船は当時の海軍は脚氣予防を意

補給機能は注目に値する。中でも前進根拠地の糧食

「防研セミナーブリーフィング」執筆者の石原2佐が今回のテーマをさらに深掘りして解説し、防衛省職員と突っ込んだ議論を行う「防研セミナーブリーフィング」が9月26日(金)午後3時~4時まで、市ヶ谷のF1棟6階「国際会議場」で開催されます。参加者・聴講者は隊員に限定します。ご興味ある方は奮ってご参加ください。▽問い合わせ=防研企画調整課03-3268-3111(内線29177)まで。

製造されたものを給糧船で供給。さらに、給糧船には屠獸場が備えられ、生き家畜を搭載・処理して新鮮な肉を提供する高

る日本海軍のロジスティクス体制は、戦局に応じて柔軟に展開される前進根拠地と、それを支える特設艦船群の機動的運用によって支えられていた。